

『瑜伽師地論』に見られる身表色

松 本 成 裕

〔1〕 外界の対象に対し有部を始めとする各派は種々に解釈を行ったが、特に身表色に関しては、有部では形色、經量部では顯色の集積したもの¹⁾に相当すると『俱舍論』(AK. iv, 2bc)及び『成業論』(D: shi. 135b, 3)には述べられている。これらの解釈に対して『瑜伽論』に見られる身表色は顕著な違いを見せる。『瑜伽論』に述べられる。

眼識の所縁とは何なのか。…略して顯色と形色と表色とである。表色とは何なのか。即ち、取ること、捨てること、曲げること、立つこと、坐ること、横たわること、近づくこと、超すこと、以上かくの如きを始めとするものである。表色、行動、作用、動作、発揮、活動は同義語である (YBh. 4, 14-5, 7)。

つまり、瑜伽行派は有部や經量部が顯色・形色と別個に立てない表色を色法の内に分類し、具体的に身体で以て表される行動、即ち身表色 (kāya-vijñapti-rūpa) として規定する。この『瑜伽論』に説かれるが如き「身表行動説」は、既に『俱舍論』(AKBh. 192, 23)や『成業論』(D: shi. 135b, 6-7)で「他の人々」の説として正量部が同様の見解を取っていたと知られるが²⁾、「外法暫住説」を用いて論証する正量部の「身表行動説」と瑜伽行派のそれは一線を画す。以下、刹那減性を糸口に瑜伽行派の身表色に対する見解を探る。

〔2〕 正量部は『俱舍論』業品冒頭において「薪等は火等と結合することによって減することが現に見られる。しかも、見られる〔事実〕より最勝なる判断基準 (量) はない」(AKBh. 193, 10-11)と述べる。薪が減して灰になるためには火という外的な因が必要であり、減するために外的な因が生じた時に初めて前の物は減し、後の物が生じる (先減後生) というのである。そして正量部はこのことを基盤にして同一の物が別の場所に移動することが行動であると説明する。つまり、移動前後の差異が不確定であることを理由に、外界の対象が減せずそのまま後の場所に移動することが身表色であるという「外法暫住説」を説いているのである (D: shi. 135b, 7-136a, 1)。

これに対して有部は「[身表は] 行動ではない。有為は刹那減であるから、減

尽する故に」(AK. iv, 2cd) と述べ、有為法は外的な因を待たずに滅し、身表も一刹那一刹那生じて滅しているのだから、正量部の様に前のものがそのまま移動する様な身表は認められないと批判する。

また経量部も『成業論』で「火と日光と水と草等が熟変するという生縁と合うやいなや離れてしまった場合でも、熟変しおわったという差異が〔所熟変物に〕確かに確定されおわっていない場合でも、それら（所熟変物）は別ものでないでもない」(D: shi. 136a, 1-2) と述べて、移動前後の差異が不確定であるから同一物〔の移動〕であると考える正量部の「外法暫住説」を批判し、以下延々と正量部説を論破して、刹那滅の妥当性を強調する。但し、有部の様に外的な因を待たずに主因に由って滅するというのではなくて、一瞬間前の対象（乳）が後の対象（酪）を生じるから滅は因に由らない³⁾ と考えている。いずれにせよ、刹那滅の妥当性を唱えることによって有部も経量部も正量部の「身表行動説」を批判する訳である。

一方、『瑜伽論』には表色に関してもう一つ重要な記述⁴⁾ がある。それは、表色とは何なのか。その〔先に述べた〕同じ集積した〔顕〕色が生じ滅する場合に、変異の因によって元の場所には生じずに、その他の場所、或いは間隔を置かず、間隔を置いた、或いは近く、遠く〔といった場所〕に生じることが表色と呼ばれる。或いはその同じ場所に変化して生じることである (YBh. 5, 3-5)。

というものであるが、この記述に関して新羅の学僧、遁倫は『瑜伽論記』に於いて実に興味深い説明を施している。彼は①「〔顕〕色が生じ滅する場合に (rūpa-yotpannaniruddhasya)」という部分に対して「解表色相中。生滅相続者。不同正量部動及日出論師義。」(大. 42, 316c) と述べて、「生じ滅する場合に」の部分によって正量部の外法暫住説を否定すると考えている。更に②「変異の因によって (vairodhikena kāraṇena)」の部分に関しては、「由変異因者。即発業心刹那滅故果随因变。不同正量等先滅後生。故先生处不生。」(大. 42, 316c) と説明するのである。即ち、この「変異の」という部分は刹那滅のことを示し、正量部の「先滅後生」を否定しているのであるが、この場合に最も重要なことは、物ではなくて心が刹那滅するという点である。この遁倫が説明する「物ではなくて心が刹那滅する」という点に関しては『成唯識論』巻一にも同じ主旨の文章があり、「故身表業定非実有。然心為因。令識所变手等色相生滅相相続転趣余方。似有動作表示心故。假名身表。」(大. 31, 4c) と述べられる。この説明によれば、外界の対象は全て識の変化に他ならず、唯識にとってみれば身表が形色であれ、動作を示すのであれ、

所詮は心の表れに過ぎず、仮のものに過ぎぬ訳である。有部や経量部は外界に対象が実在し、その対象自体が刹那滅するために身表は映画の一コマの様に静止した形色としか捉えられないが、唯識にすればあくまで刹那滅するのは心であり、表色も仮法に過ぎない⁵⁾ 訳であるから、正量部の様に行動として捉えても何ら差し支えない。

〔3〕 表色説は一見した所、瑜伽行派の論書に於けるオリジナル、延ては『瑜伽論』の独創的思想の様に思われるが、実は説一切有部に於いてなされる厳格な存在の分析（阿毘達磨）を継承しつつ、経量部の刹那滅論証を心のみに帰して外界の対象の実在性を否認することで、正量部の行動説をも把捉したものである。具体的には身表色は①有部にとって刹那刹那に於ける実在の形色、②経量部にとっては刹那刹那に於ける顯色の集積、③正量部にとっては或る刹那間に於ける同一物の移動、④瑜伽行派にとっては正量部と同じく行動であるが、決して刹那滅性を否定するものではない、心の刹那滅に於ける表れ、と理解出来る。以上、『瑜伽論』の身表色に対する理解は「全て識の変化に他ならない」という唯識無境説を前提に、刹那滅性に基盤を置いたものと考えられる。

〈略号〉『俱舍論』（AK, AKBh）：P. Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, 1967; D: Derge Edition; 大：大正新修大藏經；『瑜伽論』（YBh）：V. Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Acārya Asaṅga Part I*, 1957.

- 1) Cf. 工藤道由「身表形色説——表業・無表業——」『佛教學』第16号。
- 2) Cf. 山口益『世親の成業論』法蔵館 1951, pp.78-80.
- 3) D: shi. 136b, 4-5.
- 4) この文章は校訂本ではなく写本の読みに従う。その理由は①漢訳は写本を支持する（大. 31, 279b）。②『瑜伽論記』に「即於此処変異生者。如壇場胡跪身住威儀善色不移本処也」（大. 42, 316c）として礼拝等の例を挙げて同じ場所に「変化して」行動がなされると説明されるからである。校訂者の蔵訳に基づく訂正では静止の状態をも含むことになってしまい、刹那滅を考慮した瑜伽行派の身表行動説に反する。
- 5) 身業・身表に対する経量部の区別に就いては、舟橋一哉『業の研究』法蔵館 1954, pp. 49-50.

〈キーワード〉 瑜伽論, 身表色, 行動, 刹那滅, 瑜伽論記

（佛教大学大学院）